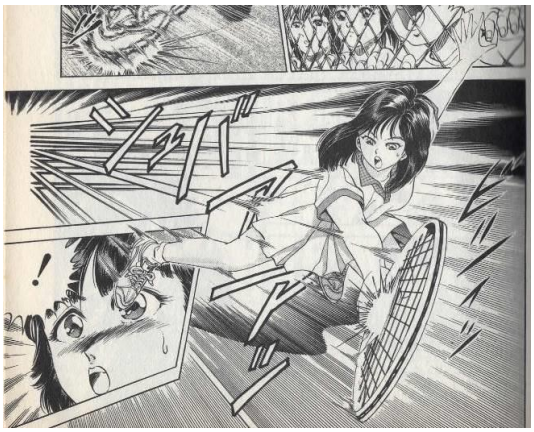
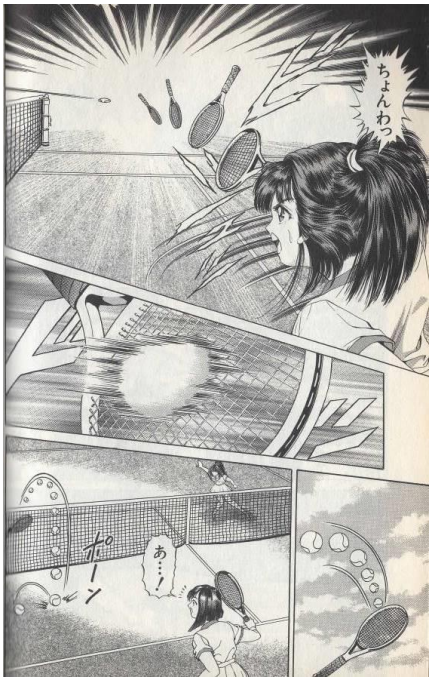
弁天堂ラグビー部は平素の練習に励んでいた。いよいよ来週から、監督のアルバイト料のおかげで実現した、1ヶ月間の超強化合宿だ。だが、あかねは浮かない顔をしていた。
あかね「こんなんじゃダメなんだ･･･こんなありきたりの練習じゃ、あの明慈を倒すことなんかできねえよ！」
前回、あれだけ残り３分で圧倒したんだから、いけると思うけど･･･。相手は朝倉抜けたし。
あかねと明が一緒に歩いていると、テニスコートに人だかりが出来ていた。男子テニス部の主将が、去年のインターハイ優勝者である女子テニス部の新人と対決をしているのだという。女子プレイヤーの名前は、「中村みずほ」である。
試合は、みずほがストレート勝ちまであと一歩のところまで来ていた。男子テニス部主将も、なんとかメンツを保とうと、コーナーギリギリをつくナイスショットを繰り出した。
しかし、みずほは



驚異的な横ステップで球に追いつき、ストレート勝ちをおさめた。
この対決は、男子部主将が勝てばみずほと付き合う、みずほが勝ったらみずほの言うことになんでも従うという条件での勝負だったようだ。
みずほ「じゃあ言います！今後一切、私や女子テニス部の女のコ達に声をかけないこと！特に私の周り半径 10m 以内には絶対に近づかないで！！」
みずほは、男に触れられただけで鳥肌が立ってしまうほど、男を毛嫌いしているようだ。
みずほ「男なんか･･･男なんか、この世からいなくなっちゃえ！」
ただのレズというのだったらまだわかるが、「男がいなくなれ」とまで言うとは、いったい昔何があった！？
さきほどの、直角に曲がってボールを打った、驚異的な横ステップをみたあかねが声をかけた。
あかね「オレに、あんたがさっきやった技を教えてくれ！」
女子テニス部員達は、練習して体で憶えるものなので、口で説明するのは無理だという。
あかね「だったら、オレに特訓してくんねえか？」
ここで、みずほは、自分とハンディつきでテニスで勝負して勝ったら、あかねにステップを教えると言った。ワンセット中にワンポイントでもあかねが取れたら、あかねの勝ちで

よいという条件だ。しかし、あかねが負けたら、あかねにはラグビー部をやめてテニス部に入部してもらうというのだ。
あかねは、この勝負を受けた。テニスウェアに着替えてくる、あかね。なかなか可愛い。
これをみて、みずほもポッとしている。**この女、間違いない**。まぁ確かに、**ラグビーというスポーツで男勝りに活躍するあかねは、顔も端正だし、そういう対象としてはベスト**だろう。
みずほ「フフフ。ついにあかねさん、私のもの･･･」
みずほのサーブで試合が始まった。
みずほ「なんとしてでも、あなたが欲しい！！」
という掛け声とともに打たれた球は、サービスエース。あかねは、身動きすらできなかった。その後も、的確にデッドゾーンを狙うショットに全く太刀打ちできない。あとワンポイントでゲームセットまで来た。あかね、ついにテニス部に転部か･･･？
最後の、みずほのサーブ。あかねは、**ヤマ勘を的中させて**、サーブをスマッシュのような形で激しく打ち返した！かなり強烈な球が返ったが、みずほはきっちりと球の落下点におり、完全にあかねの手の届かない範囲へ、絶妙なコースに打ち返した。
あかね「くっ･･･間に合わねえ！」



あかねは、**やぶれかぶれにラケットを投げつけたところ、まさかのミラクルショットとなり**、みずほからワンポイントを奪取した。結果オーライではあったが、**完全にマグレ勝ちすぎて、賭けとして危なすぎる**。必ずピンチのときには運が味方する**毘沙門大の目蓮も、あかねの強運には脱帽**だろう。
みずほ「あかねさん･･･賭けは私の負けです。約束通り、私の技術（テクニック）をお教えしますわ」
こうして、みずほは１ヶ月のラグビー合宿に同行する運びとなった。

対決の後、あかねとみずほは女子テニス部で話していた。テニスが見た目より激しいスポーツだという感想を述べるあかね。
みずほは、ラグビー界初の女性ラガーとして、あかねを以前から知っていたそうだ。みずほの夢は二つあり、一つはウィンブルドン、もう一つはあかねとダブルスを組むことだったのだという。
みずほ「だから、ここ(弁大)に来たんです。わたし、あかねさんとプレーしたかったんです」
あかねをテニス部に入れるという条件は、本心からそう思ってのことだったのだ。
みずほは、**マッサージしながらあかねの胸がチラリとみえると、欲望を我慢しきれなくなったのか、背後からあかねに抱きついた**。
みずほ「先輩･･･ノーブラなんですね･･･」
あかね「あ、ああ･･･あれってキュークツだからね」
みずほ「先輩･･･‘お姉様’って呼んでいいですか？」
全く異色の角度からの新キャラ、みずほの今後に期待だ。

弁天堂ラグビー部一同は、山道をバスに揺られていた。みずほは、隣の座席に陣取り、あかねにピッタリと寄り添っている。
栗果「ねェ、あかね先輩にベタベタくっついてるあの娘、いったい誰？」
風馬「女子テニス部の中村みずほチャン。あかねが特訓のパートナーとして連れて来たんだ」
この会話の時点で、田舎の駅から 3 時間車移動している最中なのだが、**栗果のその質問はタイミング的に遅すぎませんか？**

バスが目的地に到着した。見渡す限り山ばかり。そこは山間にある牧場だった。
監督「おみゃーらがここで合宿してる間は、牧場の手伝いをしてもらうだがや」
監督は、栗果とみずほにはご飯作りを手伝ってもらうといって、みずほの肩に手をかけたが、みずほは絶叫した。
みずほ「私･･･男性アレルギーなんです。男の人に触れられると、ジンマシンが出るんです」
男大好きの栗果には、その気持ちはいまいち理解できなかったようだ（笑）
牧場や山を活用した、合宿の特訓が始まった。ウシと押し合ってスクラムを組む FW 陣、そして山道をランパスする BK 陣･･･皆、一生懸命だ。
一方、あかねだけは独立して、みずほと特別な訓練をしていた。みずほの強烈なテニスショットの連打を浴びて、真横へのステップの習得をしようとするが、なかなか苦戦するあかねであった。
その番、あかねとみずほは一緒にお風呂に入った。
あかね「しっかし･･･いい体してんなァ。男嫌いだなんてもったいないよなァ。く～っ、この体じゃなかったら、俺確実に襲ってるな。裸が見られてうれしいやら、襲えなくて悲しいやら･･･」
みずほは、あかねと同じ浴槽に入ってきて「お姉様･･･」といいながら、肌を寄せてきた･･･が、ここで偶然、栗果が浴室に入ってきて、あかねは事なきを得た。
就寝後、女子 3 人は同じ部屋で、布団を並べて眠っている。レズであるみずほと、1 か月もの間無事に過ごせるか、あかねは物思いにふけっていたが、みずほは布団の下であかねの胸に手を伸ばしてきた。
･･･お前は、勝負に負けてラグビー部合宿に連れてこられた立場で、何してんだ？
たじろぐあかねだったが、みずほは流れにまかせてあかねに覆いかぶさり、いよいよキスしようとした！だが、この瞬間･･･上空からなにやら怪しい液体が降り注いできた。二人が見上げると、ウシが窓から覗き込んでおり、液体はウシのヨダレだった。みずほは絶叫し、とりあえずあかねから離れた。重ね重ね、あかねの強運には**目蓮もビックリだ。**

翌朝、みずほのレズ的アプローチにより、全く眠れなかったことを、あかねは明に相談した。こんな状態が 1 か月も続いたら、死んでしまう。

明「でも、あなた触っても平気だということは、男性アレルギーは彼女が勝手に思い込んでいると言うことだわ。それは治してあげたほうがいいわね。彼女のためにも」
さすが、本来のあかねは冷静な判断をするものだ。

次の晩、みずほは、あかねから「話がある」と草原の中、呼び出された。あかねを見つけるが、そばには明もいた。
みずほ「･･･！！そ、そうだったんですか･･･ふたりはそういう関係だったんですか･･･」
後ずさりするみずほに対して、あかねは自分の中身が織田勇二という男であること、明も中身が女であることを説明した。
あかね「わかったかい？お前が男アレルギーというのは精神的なもので、自分は男がダメなんだと思い込んでいるだけなんだよ。実は男であるこの俺を触っても、君は何ともないだろ。それが証拠さ。だから･･･」
だが、みずほは吹き出し、「マンガの読みすぎ」だといって信用しなかった。
口でいくら話してもダメなので、あかねと明は実際の姿を見せてあげることにした。幽体離脱して、みずほに姿をみせる勇二。本来のあかねも明から離脱して、姿を現した。
あかね（本来）「私達は、お互い男が女に、女が男に入れ替わってたから、恋愛感情なんて生まれるハズもなかった･･･でも、お互いをよく知るようになって、男女の肉体を越えて心を許し合えるようになったわ。本当の愛情に、外見的な肉体なんて関係ないのよね」

この漫画の「ノーサイド」というタイトルの真骨頂がここに表現されたといえるだろう。

ただ、こんな重要なカミングアウトを、なぜ、ぽっと出のみずほに最初にしてしまうのだろうか。幽体離脱を実際にしてみせれば、いろんな人が説得できるし、なんといっても織田教授（勇二パパ）こそ、その第一選択の対象ではないだろうか。
勇二「お前が同性しか愛せないのなら、それはそれでいいさ。しかし、それがお前が無意識のうちに作っちまった男性拒否症のせいだとしたら、それは治したほうがいい！時間はかかるだろうけどな。お前には、これからたくさんのいい男やいい女が現れるだろう。それを女だけに限定しちまうのはもったいないぜ」
ここまで言って、勇二と本来のあかねは、各々の体に戻った。
明「ごめんね、驚かせちゃって。でも、こうでもしないと信じてもらえないから･･･」
明はみずほにこう声をかけながら肩に手をかけたが、もうみずほの体にジンマシンは出なかった。
みずほ「外見の肉体なんて関係ない･･･と言っても、やっぱり私にはあかね先輩がステキですう」
みずほの男性拒否症は克服されたが、あかね好きは変わらないのであった。

中洞牧場での強化合宿も佳境を迎えた。ウシ３頭（重量 2100kg）と押し合うスクラム練習も、ウシ側があとずさりするレベルまで成長した。BK 陣も山道をランパスするが、走りながらも若干のボール遊びができる程度まで余裕がでてきた。確実に成果は出てきているようだ。
あかねとみずほは、依然として**テニスで特訓**していた。相変わらず、あかねは、みずほのショットを拾うことができない。あかねはヘトヘトになり、休憩を提案したが、
みずほ「ダメ！それでも‘男’ですかっ！？」
と一喝された。みずほは少し考え、**パンツを脱いだ。この漫画、いつもコレだな･･･**。
みずほ「ボールにとらわれないで下さい！常に私を見ててください！ボールがラケットから放たれたあとで動いては遅いんです。プロのプレーヤーは、相手のフォームやラケットの握り方でボールの位置を予測するんです。だから、ボールを追わずに私を見てください！･･･あかね先輩が、このウィングステップをマスターするためなら、私すべてを見られてもかまいません！」
あかねは、身体は女でも中身は男なので、女体には興味があるはずだ。それを利用した工夫であるわけだが、そう口頭で言えば十分な気もするが。それに、**パンツだけ脱ぐというのも中途半端な気がする。すべてを見られてもいいから身体の動きに集中しろというなら、（以下自粛）**。
再び、みずほのショット猛攻勢が始まった。みずほのパンツ脱ぎが効果あったのか、徐々にタイミングが合ってきたあかね。そして、ついに

ボールに追いつき、完全に打ち返すことに成功した！

脱落者を出さずに、弁天堂ラグビー部は強化合宿最終日を迎えた。総仕上げとして、酪農組合のラグビー同好会の皆さんと親善試合をすることになった。
実力は比較するまでもない。だが、ラグビーにとって勝敗だけが全てではない。ラグビー本来の素晴らしさを学ぶことこそが、最終課題とされた。
草むらで行なわれる親善試合。もちろん、試合は弁天堂大学が圧倒する。
あかね「･･･でもこの人達は、勝敗に関係なく、本当にラグビーを楽しんでいるということが、ひしひしと感じられるよ」
明（いつのまにか SH が正式なポジションになっている）からあかねにボールが言った。酪農組合チームは 4 人があかねを囲む。さすがのあかねも、4 人相手では潰されるかと思われたが、男達がタックルで飛び掛った瞬間、そこに既にあかねの姿はなかった。男達が顔を上げると、横方向遥か遠くに、いつの間にかあかねは移動していた。そのままトライ。
みずほ「やった。あかね先輩、成功だわ！！」
これが、特訓の成果だ。監督含め誰もが、あかねがいったい何をしたのかすら見えていなかった。

その日の夜。チームは打ち上げのキャンプファイアーをしていた。弁慶が、1 ヶ月間押し合った、ウシのユキコに気に入られるなど、盛り上がっている。
六角「ところでお前、さっきの瞬間移動のようなワザはいったいなんなんだ？もしかして、あれがお前とみずほの特訓してた‘必殺技’とゆーやつか？」
あかね「テニスとラグビーのサイドステップを合体させた･･･ウィングステップの誕生だ！」

あかねは、明慈・早世田とみんな蹴散らしてやると、ニヤリとした。
このウィングステップですが、この後、完全にゲームバランスを壊します（笑）。もう、ウィングステップしとけばOKくらいになっちゃいます。